

●二人で味わう古典和歌 (104)

あしがら みさかかしこ
足柄の御坂畏み曇り夜の我が下ばへをこちでつるかも

東歌

『万葉集』巻十四、相模の国の相聞歌十二首のうち十一首目の作。駿河国と相模国の国境である足柄峠を越えて、西へ旅ゆく男の心境が詠まれている。「足柄の神の御坂の恐ろしさに、曇り夜のような私の秘めた思いい、その思いをとうとう口に出してしまった」。「下ばへ」とは、心の底の部分に秘めつつ恋しく思っていること。神への畏怖から、故郷を出たときより募る恋しさを、その妻の名前を、洩らしてしまつたという。秘密を抱いたまま通り過ぎると神の祟りがあるという俗信に基づいているのだろう。

名前くらい別に構わないのでは、とつい思ってしまうが、名前は人物そのものであった古代感覚についてここでは留意しなければいけない。『万葉集』冒頭で雄略天皇が「籠もよ み籠もち 堀串もよ み堀串もち この岡に 菜摘ます子 家告らせ 名告らさね…」と呼びかけていたよ

うに、異性に名前をたずねることは求婚することであつた。その相手に名前を告げることはOKの返事、心も身体も自分を相手に捧げることと同義であつた。普段は本名を使わず、家族のみがその名を知っているのが普通だつた。恋人や妻など大切な異性の名前を告げるのは、神へその人を捧げることにはほかならない。それほどまでに畏れるべき「神の御坂」とはどのような場所であつたのか。

「やまと言葉」「サカ」はもともと「坂」や「境」や「離く」など複数の意味を持つ語だつたという。東国に住む旅人が越えなくてはならない足柄峠は、故郷からいよいよ離れ、異郷へ足を踏み入れる国と国との境界であり、(こちら)から(あちら)の世界へ越境する場所であつたはずだ。当時の旅は(あちら)へ行つてしまえば無事に帰つてこられるかわからない。故郷への思慕と、無事の祈りと、自然への畏怖。人々の願いがやがて坂に神を宿らせたのではなかつたか。

神に捧げられた妻はその後どうなつたのか。「下ばへ」を明かしたことで許してもらえたのだろうか。(小島なお)

